

第56回 福岡県地方史研究協議大会

福岡県の風水害

一次の世代に語り継ぐ、忘れてはならない歴史2-

主催 福岡県教育委員会 福岡県地方史研究連絡協議会

期日 令和5年6月24日(土)

会場 福岡県立図書館レクチャールーム(本館地下1階)

日程

13:00 開 会

◆福岡県立図書館長あいさつ

◆福岡県地方史研究連絡協議会長あいさつ

13:10 研究発表(1) (35分)

「遠賀川の被害と治水の歴史」

八幡郷土史会 千々和昭男 氏

13:45 研究発表(2) (35分)

「平成2年7月と平成24年7月に八女地域を襲った水害」

懐良親王顕彰会 山口祐士郎 氏

14:20 休 憩 (10分)

14:30 研究発表(3) (35分)

「遠賀郡の二つの年代記に見る江戸時代の風水害」

八幡郷土史会 有馬守 氏

15:05 研究発表(4) (35分)

「筑後地域及びその周辺地域における気象災害

～森林管理の立場から～」

久留米郷土研究会 福島敏彦 氏

15:40 発表者による意見交換 (10分)

15:50 閉 会

講師プロフィール

◎千々和 昭男（ちぢわ あきお）氏

所属	八幡郷土史会
研究テーマ	古文書解読による郷土史
主な執筆・著作	『角川日本地名大辞典40 福岡県』（角川書店、1988年）、『香月の歴史と文化』（1993年）、『北九州市の文化財随想』（北九州市の文化財を守る会、2012年）、『北九州歴史散歩 筑前編』（海鳥社、2020年）

◎山口 祐士郎（やまぐち ゆうしろう）氏

所属	懐良親王顕彰会
研究テーマ	筑後・九州地域における南北朝史
主な執筆・著作	

◎有馬 守（ありま まもる）氏

所属	八幡郷土史会
研究テーマ	歴史全般
主な執筆・著作	『筑州鎮守岡郡宗社志』読みくだし

◎福島 敏彦（ふくしま としひこ）氏

所属	久留米郷土研究会
研究テーマ	林業経営（森林立地）
主な執筆・著作	『福岡県林業史 平成の林政史と福岡県林業史編』 （福岡県林業技術者連絡会、2019年） 『福岡県林業史』（福岡県林業技術者連絡会、2015年） 「福岡の森林林業の歴史」（『森の講座 2016年』所収） 「福岡県における農山村の定住条件について」 （『林業試験場時報 1982年3月 29号』所収）

[研究発表①]

遠賀川の被害と治水の歴史

千々和 昭男（八幡郷土史会）

はじめに

昨年度は「江戸時代の遠賀川流域の洪水」と題して、江戸時代に起きた14回の洪水を紹介しました。また、江戸時代の洪水対策も紹介しました。

今回は主に治水という観点から、江戸時代から昭和時代までの遠賀川の歴史を紹介したいと思います。

1 被害の記録

遠賀川流域は低地が多いため古くから、大雨が降り洪水となり大きな被害をもたらしてきました。その低地を表す言葉に「1野面、2新延、3奈良津」がありました。古文書には、江戸時代の住民が直面した困難が生々しく記録されています。例えば、遠賀郡の大庄屋の仰木文書には1850（嘉永3）年の被害の様子が次のように記されています。

嘉永3年5月は大雨が続き、言語道断の出水で村々の田圃が一面の水湛えになった。

仰木は小舟に乗って村々を見回った。6月2日には植木村の本土手が切れて、材木、箆筒、小道具などが夥しく流れてきた。支流の土手も切れて床上に水が上がったので、牛馬は土手に引き上げ、人は神社や小高い家に避難した。植木村から芦屋町まで一面の水浸しになったが、怪我の死人や流失死人、倒れ牛馬などはない。7月11日には大風が吹き、転家、屋根破損、転木、神社鳥居の倒壊が続出し、畑作の大豆、粟、木綿、蕎麦の被害が大きく、樫実は落ちた。（発表者による抄訳）

2 治水の歴史

1600（慶長5）年に黒田長政は筑前に入国すると、流域の新田開発や遠賀川大改修工事を命じました。当時は遠賀川は東流れと西流れに分かれていたので、排水をよくするため、奈良津から河口までの築堤、開削を命じました。上流の水を直線的に流すため、広渡と立屋敷の間の川を開削し、堤防は左岸は垣生から広渡、右岸は中間から古賀まで築かれました。

工事は1613年に着工して1628（寛永5）年に完成しました。

この工事人は御牧、鞍手、宗像、嘉麻、穂波5郡の百姓でした。その後、上流からまっすぐ芦屋に流すため、左岸の広渡から島津まで、右岸の古賀から猪熊まで土手が築かれました。この工事は1744（延享元）年に着工して、1750（寛延3）年に完成し、「延享の治水」と呼ばれました。この時の福岡藩主は黒田継高でした。

遠賀川の下流部は複雑な流路のままでした。そこで、立屋敷村の庄屋入江喜太郎は古賀村前で大土手を築き、本流を締め切り、猪熊・島津間の水流を本流にしようと考えました。この計画の請願を受けた郡代の山中甚六は喜太郎に対して覚悟のほどを尋ねました。喜太郎は「甚六様に難儀をおかけするならば、私の首を差し上げます」と答えました。この願書を受け取った遠賀郡奉行の栗生十右エ門は現地を調査して、1744（延享元）年から工事が開始されました。喜太郎が命をかけて役所に願い出て完成した工事であるため、その遠賀川土手は喜太郎土手とか首土手と呼ばれました。

また、長政は洪水灌漑、物の運搬などのため、中間から折尾を経て洞海湾に流れる堀川を造ることにして、1621（元和7）年に工事が着工しました。しかし、長政が1623年に死去したため工事は中止になりました。この工事を担当したのは栗山大膳であるため、大膳橋や大膳堀などの地名が残っています。

その後、6代藩主黒田継高が1751（宝暦元）年に工事を再開しました。初めは大膳堀を掘っていたが上層土が落ちるので、貴船神社のたたりと言われ、北側の車返しの岩盤を切り抜くことに変更しました。この工事は1757（宝暦7）年に完成しました。しかし、川幅が3間と狭いため、6間に広げる工事が行われ、1759（宝暦9）年に完成しました。

さらに折尾から洞海湾まで通じる工事が完成したのは1762（宝暦12）年でした。遠賀川から堀川に水を引入れる水門が中島にあったが、水勢に崩されるため、一田久作が備前の吉井川を調査して、総社山の岩盤に水門を造ったのもこの年でした。しかし、遠賀川を石井手でせきとめるため、上流に水害が発生しました。そこで、川口を北側の楠橋村に移すことになり、その工事が完成したのは1804（文化元）年でした。

度重なる洪水に対して、村人は水が村に入らないように水門を造りまし

た。江戸時代には沢山ありましたが、今では飯塚と直方の3カ所に残っています。道の両側にある石に溝が掘られ、そこに板をはめる仕組みでした。安政6年の大雨の時に木屋瀬村の瓜生長作は堤防にある取水用の水門を守り、濁流に流されてなくなりました。その記念碑が菜の花大橋の近くに建てられています。

農業用水のため遠賀川の各所には大小の多くの井堰が築造されましたが、直方市植木の花ノ木堰と上境の岡森堰は代表的なものです。岡森堰は1772（安永元）年に着工し、1774年に完成して、遠賀と鞍手7カ村を灌漑しました。感田村大庄屋渡邊善吉が農民を干ばつの被害から救うため、熱心に福岡藩に働き掛けた結果でした。

しかし、この井堰のため近くの小倉藩の4カ村は大雨が降ると水難にあうと抗議が続きました。そのため福岡藩と小倉藩が話し合っ、福岡藩が小倉藩に対して毎年270俵を渡すことで1843（天保14）年に決着しました。

また、飯塚市の5カ村は用水不足で干害を受けるため、大川から取水することを福岡藩に出願し、許可を受けて1835（天保6）年に着工し、3年後に4万人の人夫で完成し、5カ村用水と呼ばれました。

明治時代になっても17年、22年、24年、28年、38年と遠賀川は氾濫しましたが、特に1891（明治24）年7月は直方で水位が10mに達し、堤防も各所で切れて、死者は45人にもなりました。38年の大水害では特に炭鉱が大きな被害を受けました。当時の炭鉱は石炭の積み出しを遠賀川水運に頼っていたため、川岸に近い所に坑口があり、関連施設もその近くにありました。度重なる被害は福岡県だけの予算では改修工事は不可能であるため、県や炭鉱関係者などは国費による基本的な改修工事を強く要望しました。そして翌年に遠賀川改修工事が帝国議会を通過して国営事業として実施されることが決定しました。日本経済の発展に伴い、石炭の需要が高まり、筑豊でも石炭の生産量が大幅に増加しました。そのため遠賀川の第1期河川改修工事は石炭を採掘する炭鉱を水害から守ることに重点が置かれました。そこで炭鉱周辺の浸水をなくし、蛇行した川をまっすぐに、流れやすいように掘り広げ、出てきた土で堤防を築くという工事が行われました。この工事には掘削機や浚渫船、蒸気機関車などが使われ、岩盤地帯を掘るときはダイナマイトが使われました。この工事は1906（明治39）年に始まり、1919（大正8）年に竣工しました。

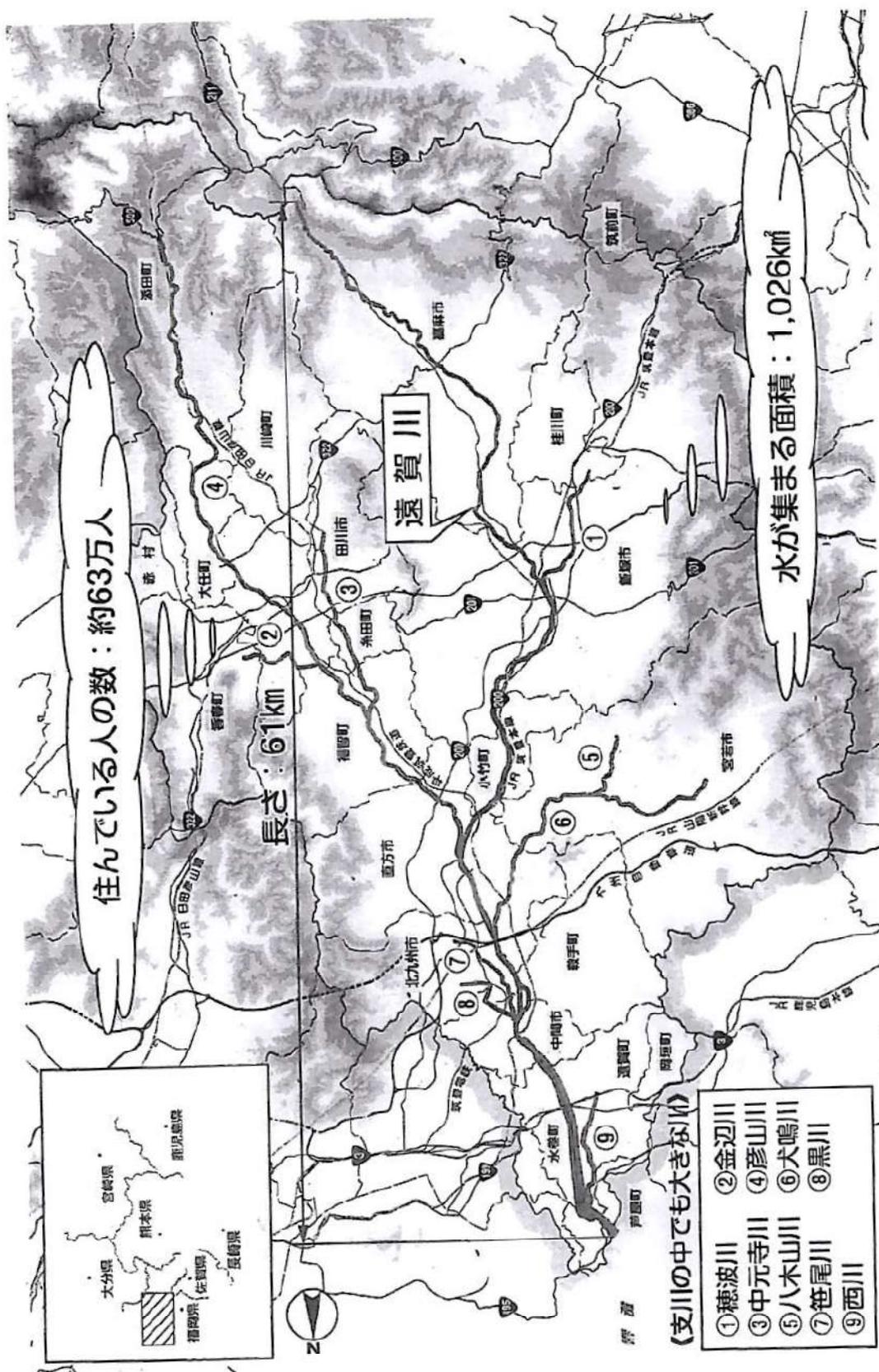
【参考文献】

香月康晴『遠賀川』（海鳥社 1990年）

林 正登『遠賀川流域史探訪』（葦書房1989年）

栈比呂子『運河堀川400年の歴史を語る』（海鳥社2019年）

『わたしたちの遠賀川』（遠賀川下流域河川環境教育研究会2013年）



遠賀川

図 2

直方の岡森堰

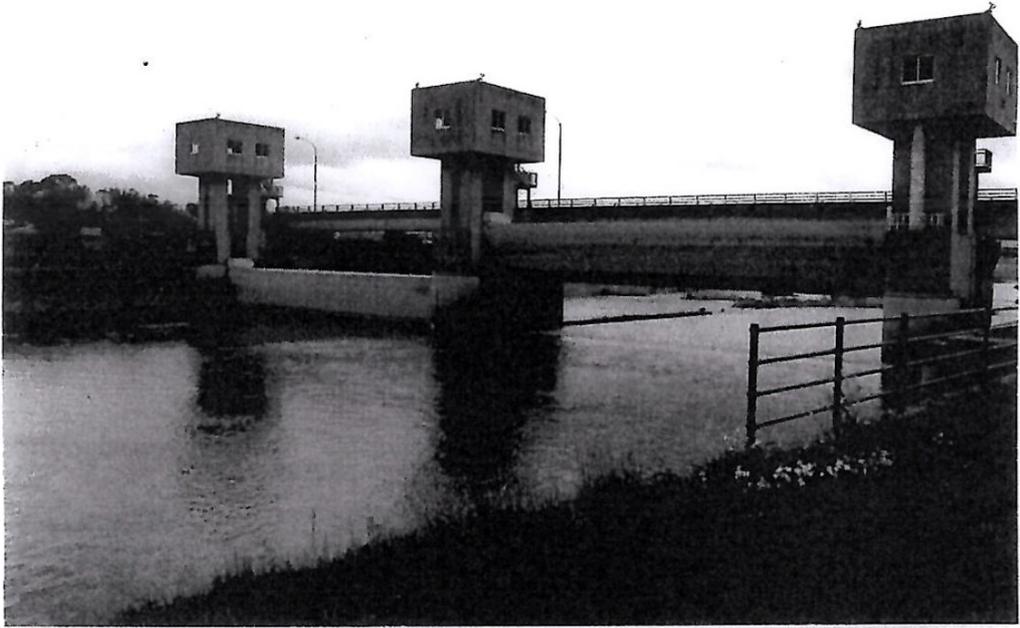


図 3

感田の水門跡



[研究発表②]

平成2年7月と平成24年7月に八女地域を襲った水害

山口 祐士郎（懐良親王顕彰会）

福岡県南部に位置する八女地域は、年間降水量も多く幾度となく水害が発生してきました。平成2年7月と平成24年7月の八女地域（特に平成2年は立花町、平成24年は星野村）における水害はどのようなものだったのでしょうか。また、災害が発生した時に地域住民たちはどのような行動をして互いに助け合い、災害に立ち向かったのでしょうか

1 平成2年7月2日の集中豪雨と立花町

(1) 立花町の被害の状況

この年6月28日から7月2日の6日間八女地域の連続降水量は557.6ミリで1時間当たり降水量が最大79ミリに達します。

7月2日3時45分に大雨洪水警報が発令、立花町内を流れる辺春川と白木川には山林から土砂や流木が流れ出し、橋に掛かって堰のようになり周辺地域の家屋の浸水や道路の決壊が起こり、田畑の作物も押し流します。

人的被害	負傷者 91 人
全半壊家屋	51 棟
橋梁損壊	20 ケ所
国道3号線をはじめとする道路の寸断	574 ケ所
がけ崩れ・地滑り	1,215 ケ所
罹災者数	6,678 人（当時の町人口 18,000 人）

(2) 被災現場の一つ立花町中辺春地区周辺では

中辺春地区は、八女市内より国道3号線を熊本方面へ約11km行った所で辺春川沿いの地区です。立花町では7月2日3時45分に大雨洪水警報発令、7時に全地区で床下浸水・道路冠水の被害が出始めます。

9時8分に中辺春地区、横道区、吹春地区、漆谷地区で床上浸水が発生します。10時県道八女玉名線、土砂崩れ。10時15分中辺春より下流の地区で辺春川氾濫し床上浸水、道路冠水が発生します。10時25分国

道3号線で土砂崩れ、道路冠水のため通行止めとなり、町当局から炊き出しは困難という通告がありました。

この水害を経験した中辺春地区の住民たちは、見る見るうちに増水し氾濫していく辺春川と山あいからの土石流と流木に恐怖を感じたと語っています。

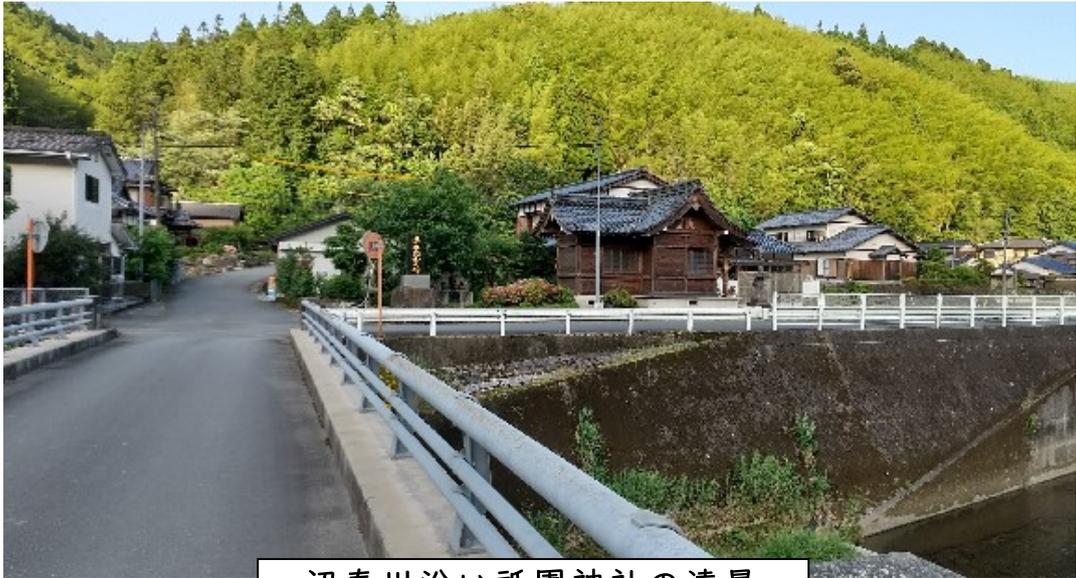
朝、八女市内へ行ったが途中で家まで帰れず、避難していた知人の家で自宅から流れ出た家財を見た人、見る見るうちに増水した濁流が家に押し寄せ、泥水が家の中を流れたと語る人。

行政当局の対応がないという事で、まずは地区のコミュニティが機能し始めます。このような状況の中、中辺春地区では15時過ぎに被災を免れた各家庭に分担して食事の依頼。16時に地区の評議委員、隣組長会を開き、次の対応を協議しました。

水害が発生した次の日の7月3日には地区民総出で奉仕活動を行い、被災家庭の住まいの確保に当たります。これにより、被災住宅の床上の泥除きを実施。炊き出しは婦人会を中心に昼食130人分、夕食70人分を作るなどいち早く被災支援を取り組みました。区民たちは手記の中で、二度と遭いたくない水害の恐怖を記すとともに、その後の地域一体となった奉仕活動を称賛しています。

また、地域で唯一、社殿が崩壊した「祇園神社」に対する思いは、また社前の狛犬が一對とも濁流に流されましたが、500m下流の同じ場所で一對揃って発見されるという感動的な話が語り継がれています。

辺春川のたもとにある祇園神社には、今もあの時の水害を忘れないように記念碑が建てられ、流された後に発見された狛犬はその横に一對で鎮座しています。



辺春川沿い祇園神社の遠景



洪水記念碑



濁流に流されても同じ場所で見つかった狛犬

2 平成24（2012）年7月14日の九州北部豪雨と星野村

（1）星野村の被害の状況

平成24年の梅雨時期の状況は、13日の夜遅くに再び激しくなり、14日未明から昼前にかけて猛烈な雨が降りました。

県道や市道ががけ崩れや崩壊で寸断し、八女地域の中の星野地区では一時陸の孤島になります。

主要道路の県道52号線が、上陽地区で2ヶ所のがけ崩れにより八女市内方面から通行不能になりました。更に、村内に八女方面から入り3.6km地点で道路が決壊し、4.3kmの県道から別れ、うきは市へ通ずる市道が決壊、5.9kmの地点や星野支所より手前の地点でも道路が決壊します。この他にも、がけ崩れや土石流で星野村は一時的に村外への通行ができなくなり、村内の中に孤立する集落や施設ができました。

また、村内入口より5.2km地点の地滑りは長さ約230m高さ約275mという大規模なもので土砂などが星野川へ流れ込みせき止め湖が出現しました。

（2）星野川流域で星野村西部にある小野地区の住民の被災現場では

当時小野1区の区長をされていた原口さんと、小野地区に在住の方たちの話を参考にして振り返ります。

① 災害発生時の状況

原口さんは「14日午前5時20分頃、激しい雨の音で目が覚める」、この日の最大1時間降水量が久留米の耳納観測所で80ミリ（6時23分）八女市の黒木観測所では91.5ミリ（9時47分）を観測。

避難所のカギを開けに行くと、すでに地区内の人たちが10人ほど集まっている。

② 地区内の民生委員をはじめ住民との連携が始まる

川が増水し自宅に危険が迫っている住民で未だ残っている人に避難指示。また、民生委員からは「要援護者への対応」が報告される。

③ 避難所での活動

7時30分ごろ避難所の朝ご飯の用意を地区内住民の協力で準備、しかし、停電と断水状態だったため、茶工場の発電機を使い井戸から水を汲みだして準備。この頃避難者は50人になる。再び雨がひどく降り出す。避難所の横を流れる支流の川は、砂防ダムのおかげで氾濫せずにいた。高齢の女性を消防ヘリが救助に向かい無事に救出。

④ 星野川上流の山腹崩壊

地区の避難所からの移動と、その後に星野川上流に山腹崩壊による堰止湖ができ、更に困難なことが起きる

避難所に宿泊することを指示し、明るいうちに夕食の準備に取り掛かる。この時点で避難者の数は90人に。夕食時「避難所の裏手にある裏山が崩壊」との報告、この避難所はあぶないと判断し、1.5 km先にある避難所への移動を指示。

次の避難所に移動して1時間もしないうちに、上流で山腹が崩壊し、土砂などが星野川を堰き止め、ダム状態になっていると情報が入り、「いつ決壊するかわからない」という事態に。一気に決壊すれば避難所も危険なことになると。そこで、旧小学校の2階の教室へ移動することを指示。堰止湖はその後一気に決壊することはなく、少しずつ解消していく。

⑤ 八女市災害対策本部と連絡が取れる

21時20分頃八女市災害対策本部と連絡が取れる。安心と反省。

この頃、避難者は約400人になり、それを本部に連絡し15日の朝食を依頼する。次の朝、自衛隊のヘリコプターで救援物資が届く。

反省として、災害時に避難所の水・トイレ・停電の対応等の準備ができていなかった事と要支援者への支援の仕方や自主防災意識について。

(3) 県道が星野川へ滑り落ちその上にある茶工場へ避難していた地区の方たち

避難所として決めていた場所に行けず、避難していた茶工場が危険になる事態となりました。次の避難所へ移動し、避難者も100人に達しました。

(4) 集落に通じる橋が濁流に押し流され孤立した住民たちは

14日の朝から川が増水、夜に堰止湖の情報が入り、集落住民14人で近くの高台へ移動し一夜を過ごします。15日にヘリコプターが救助に来ますが、ヘリコプターが怖くて乗れませんでした。

(5) 豪雨災害はいたるところで発生していた

この報告は八女地域の星野川流域で星野村の一つの地区での出来事です。様々な場面で住民たちが手を取り合い、知恵を出しながら豪雨災害に立ち向かいました。住民からは、今後に生かされるべき反省と消防団をはじめとした救援の方々への感謝の思いが語られました。

しかし、この平成24年7月の九州北部豪雨では星野村のほかにも、八女地域・矢部川流域のいたるところで災害が起こり、孤立集落ができ、ヘリコプターの出動が数多くあったことをその後の報道で知りました。

※災害後、地区で作成されたチラシ
「平成24年7月14日災害時からの教訓」

平成24年7月14日災害時からの教訓

各家庭のよく見えるところに貼っておいてください。



- 自分たちの住んでいる地域を、皆でよく知る。【災害は地域によって異なる】
- 避難所は近くに、前もって集落で決めておく。【まっ暗に災害が起こったら…】
- 皆が安全か、安否の確認名簿を、前もって作成しておく。【集落単位で責任者を前もって決めておく】
- 集落の1人暮らしの高齢者は、誰が支援するかを決めておく。【日頃から集落の高齢者に話をしておく】
- 災害時前に、各個人で、水・保存の効く食糧・少量の米・電池・懐中電灯・ガソリン（燃料）等用意しておく。【自分の命は、自分で守る考えを日頃からもっておく】
- 災害が起きても1日～2日頑張れば、必ず公助があると、確信しておく。【頑張る勇気が出る】
- 今後、災害はどこでも起きる意識を持つておく。【住民の意識向上】
- 災害が起きたら、行政区長に連絡すること。【行政区長 ⇒ 災害対策本部】

この下に「災害時の隣組一時避難所等」として隣組名・一時避難所・炊き出し場所・連絡先・名簿確認者（副）を明記した。一時避難所では3時間～5時間以内に状況に応じて次の対応を検討すること、対応可能な家庭は1回まで炊き出しの協力を行うことなどを決めた。

【参考資料】

『水魔襲来、その時私達は』編集・中辺春「水魔襲来」編集委員会
『2012.7.14九州北部豪雨災害星野村災害復興記録写真集』

星野村災害復興記録写真集編集委員会

[研究発表③]

遠賀郡の二つの年代記に見る江戸時代の風水害

有馬 守(八幡郷土史会)

【はじめに】

仕事を辞め、時間に縛られない自由の身となって、余生に選んだのは歴史へのアプローチである。文字史料のない先史・縄文・弥生・古墳時代は不明のことが多く、知のロマンを感じるものであったが、博物館などで目に触れる古文書も、何が書いてあるのか分からず、興味をそそられた。それを学びたいという思いで入ったのが、古文書講読会を開いている八幡郷土史会であった。それから既に14年が経つ。

現在月に3回、二つのテキストを読んでいる。郷土史会の先生は千々和昭男さんで、その世話は郷土史会事務局長であった児玉さん、同石丸さんが務め、現在は副会長の私が担当している。現在読んでいるテキストが『年暦算』で、読み始めて既に2年半になる。また、『筑州鎮守岡郡(おかのこおり)宗社志』は、私が水巻町文化財保護委員となって、水巻町の歴史資料館に保存されていたそのコピーに触れ、その訓み下し文の下書きをされていた故柴田貞志さんのメモを参考にして、平成二十八年に本として作成した文書である。

今回福史連から「風水害」というテーマを頂いたが、標記の二つの史料からそれを見ていきたいと思う。いずれも江戸時代に筑前国遠賀郡の人によって書かれたものであり、ローカルなものではあるが、それゆえにこの福史連という場において発表させてもらうことは、意義有ることと考える。

一 筑前国における遠賀郡

江戸時代筑前国には、15郡があった。これは江戸時代末で言うと、福岡藩・秋月藩の地域である。現在の福岡県は明治九(1875)年に成立するが、この時小倉県(小倉・豊津・千束)、三潞県(久留米・柳川・三池)、中津県の一部(上毛郡)が合併されて成立した。

筑前国の15郡は、早良郡・那珂郡・席田郡・糟屋郡・宗像郡・遠賀郡・鞍手郡・穂波郡・嘉麻郡・上座郡・下座郡・夜須郡・御笠郡・志摩郡・怡土郡である。

今回取り上げる二つの年代記を生んだ遠賀郡は、筑前国の北部最東端に位置し、東は豊前国(小倉藩)と接し、南は鞍手郡、西は宗像郡と境する。北は海である(響灘)。現在の行政区で言うと、北九州市の戸畑区・若松区・八幡東区・八幡西区、中間市、遠賀郡四町(芦屋・水巻・岡垣・遠賀)がその範囲である。

二 二つの年代記の概要

(1) 年曆算

期間	延宝元(1673)年から明治九(1876)年まで
著者	<p>歴代の鬼津村の庄屋であった井口(いのくち)氏が代々記録してきた文書である。延宝元年に初代太郎右衛門から四代目である亦七が書き始め、江戸時代最後の当主になる彦五郎の父清四郎(旧名茂吉9代)が弘化三(1846)年に75才で死去し、庄屋を50余才まで勤めたという記録があるので、それから推定すると、彦五郎が天保元(1830)年頃から庄屋となり明治九年まで書き綴ったものである。</p> <p>【井口家略系】 太郎右衛門—徳右衛門—亦右衛門—亦七—彦五郎 —太郎右衛門—彦五郎—宗蔵—清四郎—彦五郎</p>
文書の 特徴	代々鬼津村庄屋を勤めた井口氏が、その年々の気候と米・麦等の出来具合、米値段、また近隣の事件等を記述している。鬼津村は、芦屋町の南に接した村であり、芦屋は福岡藩有数の港であったため多くの商人やまた米問屋、藩の代官もいた。そのため米価に限らず上方辺の情報や、藩内の情報も手に入れやすかったようで、そういう記事も多く書かれている。



(2) 筑州鎮守岡郡宗社志

期間	元和三(1617)年から文政六(1823)年まで
著者	松本久蔭(ひさしず)
文書の 特徴	<p>この文書は『福岡県史近世資料編年代記(一)』に、能美安男氏(八幡郷土史会初代会長)によってその前半部が収載されている。松本氏(元は野上氏)は、代々続いている遠賀郡の広渡・今古賀・立屋敷村の八剣神社の神官の家系で、久蔭(1799~1849)はその十一代に当たる。安永二(1773)年に立屋敷村八剣神社近くにあった保食(うけもち)神社が祭の花火により焼失してしまい、再建されることはなかった。この保食神社はこの文書に依れば享保十七(1732)年五穀成就祈願を行う惣郡鎮守社と定められ、宗社宮と称したとする。</p> <p>しかしその後寛延二(1749)年に郡宗廟(一郡一社)にて五穀成就・豊年祭祈祷が行われることになり、遠賀郡は高倉宮が選ばれた。それに不満の松本氏は郡奉行に掛け合い、「郡宗廟に準じ五穀成就祈禱を執行」の裁可を受けたが、その神社が焼失したのである。</p> <p>この神社の再興を願い、かつ高倉神社と同格の待遇を望んで書かれたのがこの『筑前鎮守岡郡宗社志』であり、『年曆算』と異なり地域全体の出来事を網羅するものではなく、保食神社でこういう祈禱をしたなど、言わば神社年代記である。</p>



三 風水害記事の突き合わせ

二で述べたように、二つの年代記はその内容から『年暦算』が村役人たる立場で書き継がれたもので、これをベースとして別表①のとおり風水害の記事を列挙した。すると、延宝二(1674)年から慶応三(1867)年までのおよそ二百年の間に、全部で37件の風水害記事があり、これを記事内容から普通の災害Aと大災害Bとに筆者の判断で分類した。するとAが23件、Bが14件となった。そこでさらにその中のBの災害について、『筑前鎮守岡郡宗社志』に風水害の記事があるかを調べたところ、元禄十五(1702)年から文化元(1804)年の間8件中、4件について記事があった。その中で二つの記事を以下に取り上げる。

(1) 明和四(1767)年

年 暦 算	<p>六月七日洪水。垣生土手百間余切る。その外所々破損所数知れず。郡中困窮、田畠草荒し手入れ出来ず。</p> <p>七月朔日夕より<u>白雨</u>(はくう)、二日、三日同じ降り。四日夜より地雨(じめめ)に成り大に降る。五日、六日、七日それより十日まで降り続く。</p> <p>一作、稲作開発年号書き上げ有り。盆後より蝗出来る。これ已前享保十七年子の凶年の様に相成るべしと、騒動大形(おおぎよう)ならず。</p> <p>川筋皆損じ、東西山付き村々は春免百姓中困窮、今年に極る。冬中寒強し。</p>
筑 前 鎮 守 岡 郡 宗 社 志	<p>同年六月洪水にて、七日夜垣生村塔ノ松と申す所の下大土手大に切れ仕り、同村抱内所々砂山出来。右に付き同月下旬岩瀬村にて松木数百本、并に中間村雀藪・浄花寺藪両所にて柵木夥しく御切取りに相成り、遠鞍両御郡夫を以て切れ所へ蛇目籠を掛け大土手御築立に付き、御普請中日乞并に出夫安全御祈祷の儀、御郡奉行嶋井市太夫殿より相達せられ執行仕上げ候。</p>

(2) 寛政四(1792)年

年 曆 算	<p>正月中寒烈し。麦作能し。閏月二月に有り。</p> <p>四月下旬頃<u>島原雲仙山</u>焼け崩れ大騒動、死人万人に及び牛馬数知れず。恐ろしき事なり。</p> <p>五月十六日大坂火災の由沙汰。頃日米直段三十四、五匁位。</p> <p>福岡御館惣御建替。去年より斧立、頃日御成就の由。</p> <p>御山東照宮鳥居建つ。早良郡<u>栢原山</u>より石切り出し、鳥居高さ四間と云ふ。</p> <p>七月初めより蝗出来る。油入れ数へん、虫氣居合安心の処、同二十三日夜大風、二十六日又大風雨。両度故田畠大に痛む。</p> <p>米直段八十錢四十二匁余りに相成れども、売る人は無し。</p> <p>同月十七日夜西の方虹頭はる。十八日夜も同じく虹立てり。珍しき事なり。昔より聞き及ばず(月の虹は白し。赤色無し。この節のにじの色はかの如し)。</p> <p>九月御郡奉行坂田新五郎殿、御免方井ノ上三太郎殿。</p>
筑 前 鎮 守 岡 郡 宗 社 志	<p>同年秋、蝗氣の儀は御祈禱の御奇特、及び鯨油の大功を以て兎や角と相凌ぎ、却って毛上宜しく十分の事に候処、七月十七日二百十二日に相当り、未下刻頃より天気不快にて、戌刻西の方に古今無双の大虹立ち、二十二日戌刻希世の大地震。その鳴る音大地も裂ける如し(肥前国嶋原温泉嶽崩る由にて、当年は日々地震す、今日もそれ故なるべきか)。</p> <p>二十三日庚申雨天。日中より少し風立ち、子刻に至り雨晴れ大風と成る。折柄田方出鉾の時節に付き、翌日五ッ時田方惣白穂となりぬ。二十五日戌刻頃より又々大風起り、二十六日申刻に至る。右に付き川筋は洪水にて、穂水旁以て皆損とも申すべし。右に付き頃日まで米一俵に付き代二貫八百目位にこれ有り候処、忽ち芦屋相場高直にて当日は三貫六百文と相成り候。左候えば貧民困窮に付き、米直段折合に相成り候までは一俵に付き三貫文宛に売買致すべく候旨、御町方(博多・福岡両市中)へ仰せ達せられ候由。当秋御国内御損毛高米二十八万九百二十五俵余とか承知仕り候。</p>

補足 明治初期と現在の人口比較

(1) 多様な記事を載せる『年曆算』

『年曆算』は『福岡県史』には採録されていないが、その内容が近辺の事件(心中事件・牛に突かれて死んだ)は勿論、藩内の殿様の動向や、上方、また特に明治維新前後の時期は中央の動向まで具に書かれていることである。それがこの文書の面白いところで、その情報源は何だったのかが気になった。これはおそらく鬼津の北

に隣接する芦屋の郡代官や芦屋商人等から直接、または彼らから情報を得ていた芦屋町庄屋を通じてではないかと推測する。芦屋は「芦屋千軒・関千軒」と言われたほど江戸時代は繁華な所であった。その芦屋の賑やかさを『福岡県地理全誌』（1880年刊行）の人口資料をひもといて、現在の人口と比較してみた。

(2) 『福岡県地理全誌』について

『福岡県地理全誌』は明治五（1872）年から作成に取り掛かり、明治十三（1880）年に刊行した福岡県（旧筑前国）の地理誌である。この作成中に福岡県は明治九（1876）年には小倉県・三潁県・中津県の一部が統合されたが、それらの地域は含めないまま成立している。明治四（1871）年に廃藩置県が行われ、府県官制が布かれた。古代に天智天皇が中央集権国家をめざし初めての戸籍「庚午年籍（こうごねんじゃく）（670年）」を作成するが、天皇を中心とする明治国家も明治四年に各県に対し戸籍の作成を命じ、翌年には全国各県で戸籍が作成された。『福岡県地理全誌』の解説に、『福岡県地理全誌』は陸軍省が命じて作られた云々とあるが、行政の命令系統からして納得しがたい。インターネットで他県の地理全誌なるものがあるか検索しても、他には全く出て来ない。福岡県即ち旧筑前国の江戸時代の以来の『筑前国続風土記』、『筑前国続風土記附録』『筑前国続風土記拾遺』という地理誌の伝統を受け継ぐものとして作成されたのではないだろうか。このような地理誌が全国で作られていたら、その資料としての貴重さは量りがたいものがあるのだが……。

『福岡県地理全誌』の人口数が、何年のものかは定かでないが、とりあえず明治十三（1880）年として扱った。しかし明治五（1872）年のものかもしれないし、江戸時代から明治になって、この時点ではまだ大きな人口変動はなかっただろうという想定で、江戸時代の遠賀郡の人口の分布を推定する所である。

(3) 江戸時代の遠賀郡の人口分布（推定）

各村ごとにあげた人口では「芦屋町」が3,400人で突出している。2番目の「若松町」の1,700人の倍となっている。芦屋浦・芦屋村・山鹿魚町・山鹿村を入れると芦屋町を中心とする範囲に7,000人ぐらいの人口がいたことになる（資料②—1）。

遠賀郡の内、現在の北九州市部と中間市・遠賀郡部とを比較したのが資料②—2である。江戸時代ではその数は25,000人と23,000人でほぼ同数である。これが現在になると45万人と13万人となり、北九州市部とそれ以外で4倍ほどの人口差となっている。明治三十四（1901）年に創業した八幡製鉄所とその関連産業の隆盛による、北九州市部の都市化によるものである。

福岡県立図書館デジタルライブラリより 「河崎 (五) 家文書 5-7 (筑前国郡絵図) 遠賀郡」



年曆算に見る年号毎風水害記事

年号	初年	終年	記事	分類	宗社
延宝	1673	1680	2年秋大風大雨にて洪水田畠損耗	A	
			8年5月より7月まで数度洪水、大損毛	A	
天和	1681	1683	なし		
貞享	1684	1687	なし		
元禄	1688	1703	14年大風吹き田方痛む	A	
			15年6月28日大雨、山汐、転家42軒、吉木村中川になり流れる	B	有
宝永	1704	1710	4年10月4日大地震		
正徳	1711	1715	なし		
享保	1716	1735	11年5月大雨、苗水入り腐り、苗不足	A	
			14年8月19日大雨降る、田畠大痛み	A	
			16年8月大風西北にて海辺殊の外大痛み	A	
元文	1736	1740	3年5月洪水、川筋損毛多し	A	
延享	1744	1747	なし		
寛延	1748	1750	なし		
宝暦	1751	1763	12年7月15日大風雨、田畠大いに痛む、破損所多し。8月8日大風雨、田畠皆損ず、秋免村々多し◎	B	無
明和	1764	1771	4年6月7日洪水、垣生土手100間余切れる、その外所々破損数知れず、郡中困窮◎	B	有
			6年8月1日終日終夜大風雨、早稲白穂大に痛む、西郷・島郷大に悪し	A	
安永	1772	1780	6年6月1日雨大に夜に入り雷、大に洪水となる、40年以来の大水、7月25日大雨風、8月25日大風田方は無業	B	無
			7年7月2日大雨3日洪水、10日大風、8月8日大雨田畠作物大痛み、実り悪し	A	
			8年8月4日5日大雨、大洪水、広渡村3カ所土手切れる、川筋村々は水底、田方大痛み◎	B	有
天明	1781	1788	2年8月20日大雨・大風、田方痛む、秋作不作総じて諸国不作の由	A	
			3年7月9日より雨、8月12日まで降り続く、大風も吹く、田畠痛み甚しきなり、近年打ち続く天災、困窮	A	
			4年8月1日大風吹く、田方には思いの外障らず	A	

年号	初年	終年	記事	分類	宗社
			6年8月28日大風雨、洪水、田方大に痛む	A	
寛政	1789	1800	2年7月23日大雨、24日老良本土手50間ほど破損◎	B	無
			4年7月23日大雨、26日大風雨、田畠大に痛む、国内下免一覽◎	B	有
			9年6月18日大雨、洪水、	A	
享和	1801	1803	なし		
文化	1804	1817	元年5月15日大雨、30年来の大水で島津本土手40間切れる。◎底井野・大隈大破損、若宮・英彦山で家流れ。 8月29日大雨、大風、大木倒れ、転家も多し。50年来の大風。	B	無
			4年8月3日大雨大水出る	A	
			7年2月初め風吹き泥降る。珍しきことなり。	A	
			8年5月9日大雨で川筋表大洪水、芦屋浜口土手切れ。7月14日大雨大水出る。	A	
文政	1818	1829	11年7月2日大風雨吹く。8月9日大風、当村転家4、5軒、他村夥しき転家なり。◎	B	-
天保	1830	1844	元年7月3日大雨大水出る。低み村々大いに痛む。	A	-
			2年5月27日大雨洪水。6月2日～4日大雨、村々破損多し。	A	-
			3年9月11日大風雨。はぜり米になる。年貢米拵え難しく、買ひ払い足し多く困窮。	A	-
			7年田植後大雨洪水出る。夏中度々洪水にて川筋、島郷に弘川・山鹿、鞍手の新延・中山辺り水損。一統凶作なり。	B	-
			9年6月26～28日大風川筋洪水、老良土手切る。川西田南湖水の如し。奈良津も切る。大水30年余という。◎	B	-
			11年6月4日より大雨、五日洪水出る。◎	B	-
弘化	1844	1848	4年7月22・23日雨降り本川筋大水、この辺りも出水。	A	-
嘉永	1848	1854	3年5月28日より6月3日まで大雨、大洪水になる。この節の大雨は古今希なり。この辺り屋敷まで水上がる。天保11年より10倍の水なり。◎7月3日大雨大水。8月7日大雨、8日洪水。	B	-
			6年5月15日大雨大水で田植止む。島津本川尻切れる。	A	-
安政	1854	1860	2年5月18～19日大雨大水、木屋瀬、島津土手切れる。	A	-
万延	1860	1861	なし		-
文久	1861	1864	なし		-
元治	1864	1865	なし		-
慶応	1865	1868	3年田植後雨降り続き、6月12日大水出る、本川洪水、低み田地大痛み◎	B	-

資料②-1

福岡県地理全誌(明治13年)による旧遠賀郡の人口

現在	村名	戸数	男子	女子	総数	現在	村名	戸数	男子	女子	総数
芦屋町	芦屋町	799	1,782	1,631	3,413	若松区	若松町	402	852	854	1,706
	芦屋浦	121	247	259	506		修多羅村	91	230	249	479
	芦屋村	104	263	269	532		小石村	82	232	219	451
	山鹿村	246	618	568	1,186		藤木村	120	360	348	708
	山鹿魚町	159	400	356	756		脇浦	50	111	111	222
	柏原浦	142	316	353	669		二嶋村	138	389	392	781
	計	1,571	3,626	3,436	7,062		畠田村	30	72	67	139
岡垣町	糠塚村	95	226	223	449		小竹村	76	214	193	407
	山田村	45	130	113	243		頓田村	84	226	215	441
	黒山村	54	151	148	299		竹並村	68	186	189	375
	波津村	119	314	315	629		蟹住村	74	178	168	346
	原村	43	123	95	218		安屋村	118	304	297	601
	内浦村	67	178	175	353		脇田浦	47	127	126	253
	手野村	67	184	180	364		有毛村	100	295	293	588
	新松原村	22	57	50	107		大鳥居村	24	72	69	141
	三吉村	62	189	180	369		岩屋浦	42	96	96	192
	吉木村	149	412	394	806		塩屋村	33	94	90	184
	松原村	39	92	87	179		小敷村	29	76	72	148
	野間村	31	87	90	177		高須村	23	57	59	116
	高倉村	103	276	242	518		計	1,631	4,171	4,107	8,278
	上畑村	29	84	87	171		八幡西区	野面	111	310	291
	海老津村	59	128	143	271	笹田		52	127	111	238
戸切村	75	210	193	403	金剛	65		183	179	362	
計	1,059	2,841	2,715	5,556	木屋瀬	350		820	806	1,626	
遠賀町	島津村	54	162	153	315	本城村		251	678	663	1,341
	鬼津村	108	268	302	570	楠橋村		171	376	370	746
	若松村	51	125	141	266	馬場山村		63	167	175	342
	尾崎村	100	253	284	537	香月村		189	489	469	958
	虫生津	69	167	185	352	畑村		79	216	185	401
	別府村	148	382	357	739	永犬丸村		99	277	296	573
	木守村	111	271	272	543	則松村		74	204	185	389
	今古賀村	45	101	116	217	折尾村		87	223	219	442
	広渡村	141	380	375	755	小峯村		42	99	107	206
	下底井野村	71	173	173	346	上々津役村		124	311	307	618
計	898	2,282	2,358	4,640	下上津役村	80		213	201	414	
水巻町	吉田村	110	287	293	580	市瀬村		41	91	91	182
	二村	54	142	139	281	引野村		109	281	273	554
	下二村	42	113	119	232	穴生村		87	227	214	441
	伊左座村	34	101	93	194	陣原村		75	214	197	411
	立屋敷村	38	109	100	209	熊手村	237	554	544	1,098	
	頃末村	66	160	160	320	藤田村	153	376	355	731	
	杵村	32	6	98	184	田町	227	503	500	1,003	
	古賀村	55	127	120	247	浅川村	76	194	179	373	
	猪熊村	71	195	201	396	計	2,842	7,133	6,917	14,050	
	計	502	1,240	1,323	2,643	八幡東区	尾倉村	109	281	270	551
中間市	中底井野村	92	226	227	453		枝光村	104	254	245	499
	上底井野村	147	365	366	731		大蔵村	145	389	387	776
	垣生村	102	295	286	581		計	358	924	902	1,826
	中間村	258	692	647	1,339	戸畑区	戸畑村	269	637	613	1,250
	岩瀬村	69	170	181	351		中原村	74	193	176	369
	下大隈村	84	212	234	446		計	343	830	789	1,619
	計	752	1,960	1,941	3,901	(作成 有馬守)					

芦屋町の人口が3,400人と2番目の若松町の1,700人の倍ある。芦屋村浦・山鹿村浦を入れると7千人。

資料②-2

	明治13(1880)年 の人口	令和5(2023)年 の人口	150年間の 伸び率(倍)
芦屋町	7,062	13,183	1.9
水巻町	2,643	27,824	10.5
岡垣町	5,556	31,624	5.7
遠賀町	4,640	19,115	4.1
中間市	3,901	40,145	10.3
北九州市八幡西区	14,050	249,095	17.7
北九州市八幡東区	1,826	64,258	35.2
北九州市戸畑区	1,619	56,088	34.6
北九州市若松区	8,278	80,563	9.7
計	49,575	581,895	11.7
福岡県(旧筑前国)	445,278	3,519,044	7.9
日本国	36,650,000	124,770,000	3.4

左記を中間市・遠賀郡と北九州市とで比較したもの

中間市 遠賀郡	1880年	2023年	北九州市	1880年	2023年
芦屋町	7,062	13,183	八幡西区	14,050	249,095
水巻町	2,643	27,824	八幡東区	1,826	64,258
岡垣町	5,556	31,624	戸畑区	1,619	56,088
遠賀町	4,640	19,115	若松区	8,278	80,563
中間市	3,901	40,145	計	25,773	450,004
計	23,802	131,891			

明治13年の段階では中間市・遠賀郡の人口と、北九州市八幡東西・若松・戸畑との人口は、23,356人:25,773人とほぼ同数であるが、現在は131,891人と約1:3になっている。人口増が多い中間市・水巻町は炭鉱開設による増加であり、戸畑区・八幡東西区は八幡製鉄の起業による増加と考えられる。

[研究発表④]

筑後地域及びその周辺地域における気象災害
～森林管理の立場から～

福島 敏彦（久留米郷土研究会）

【目的】

災害は繰り返し発生しました。その度に、「未曾有」とか、「初めての災害経験」などと言われています。災害は種類や頻度、規模にもよりますが、福岡県内で比較的知名度の高い災害は約10年ごとに発生しています。最近では、思いもよらぬ、都市部の地下浸水や内水面の氾濫などが3～5年ごとに発生しています。これらのことから、地球の温暖化などが影響しているという方もおられます。そこで、九州全域と筑後地域の災害を歴史的な視点から比較して、災害対策を考えることにします。

【洪水の範囲】

洪水による災害は広範囲からの水流を集め、数県に跨ったものです。九州で最も水系面積の広い筑後川は熊本・大分・福岡・佐賀県の4県に及んでいます。第二の水系は大淀川で鹿児島・熊本・宮崎県。第三は、球磨川で熊本県、第四は五ヶ瀬川で熊本・大分・宮崎県、第五は川内川で宮崎・鹿児島県に跨がっています。そして、河川整備は細やかな配慮によって工事が行われています。その結果、水流は上流から下流域に達する時間が早くなり、本流が溢流する以前に、内水面の氾濫が発生しています。すなわち、近視眼な象の足だけを見て、象全体の様子を見なければ、思わぬ災害が発生します。広範囲な視点での整備が必要となります。

【江戸期からの洪水頻度】

筑後川の1650年から現在までの洪水頻度は2年に1回の割合です。江戸時代の洪水は3年に2回の割合です。明治期前半は江戸期と同じ割合ですが、明治中期から現代では3.3年に1回の割合となって頻度は半減しています。巷では最近では洪水が多くなった、温暖化の影響との報道もありますが、長期の歴史的な資料によると、最近では洪水頻度が少なくなっています。

【筑後川三大洪水】

明治以降の筑後川の3大洪水記録によると、①明治22年(1898)7月4～5

日の洪水（佐賀・福岡・大分）で、久留米の瀬の下で 8.6m、宮の陣で 9.7mあり、「筑後川大出水」と呼ばれ、筑後川の沿岸の死者日田市 18人、久留米 52人で浸水家被害は日田 8,460・久留米 48,908戸で家畜も流されました。また、遠賀川では死者 11人で、家屋流出は 127戸、浸水家屋 2069戸、堤防決壊 2286ヶ所、橋梁 412が破損しました。矢部川では筏が流出して下流の橋が流失するなど県内全域で甚大な被害となりました。

②大正 10 年（1921）6 月 17 日の梅雨による大雨洪水、長雨による山地は飽水状態となり、また対馬海峡にも副低気圧が発生し、4 時間に 300mm の大雨によって、矢部川の上流の星野・矢部・大淵村で 173 町歩の山林が大崩壊して、下流域の死者は 21 人でした。筑後川も増水し、流木が多く鹿児島本線鉄道橋を除き殆どが流失しました。この時の記録としては 300 年来の被害と記載されています。③昭和 26 年（1951）10 月 10 日、ルース台風と呼ばれ、阿蘇・日田・国東・周防灘・山口を猛スピードで通過して九州全域に被害が広がりました。鹿児島県の死者 201 人、負傷者 2,566 人、崖崩れ 341ヶ所であり、大分県の死者は 396 人であり、九州全体の死傷者不明者は 3,736 人で甚大な被害となりました。以上の三大災害に昭和 28 年の災害は含まれていません。

【瀬戸内海沿岸地域の山崩れ】

昭和 19 年京都・築上地域の大水害は戦時下のことで、詳細は不明ですが、年間降水量の少ない瀬戸内沿岸地域において、豊前の三角州の小祝が水没し、旧福沢亭付近まで床下浸水し山崩れが発生しました。これらの記録は昭和 21 年の米軍の航空写真で確認できます。戦中の略奪的林業下における、広葉樹林の山腹崩壊です。

【昭和 28 災害】

昭和 28 年 6 月、県内全域の豪雨災害（福岡県・佐賀県・熊本県・大分県）です。1. 門司市の風師山の広葉樹崩壊、国道内を走る市電軌道に流木が流失しました。2. 久留米市の筑後川の氾濫、国鉄久留米駅周辺でも 1m を越えた浸水。3. 下流の安武小学校の一階まで浸水。4. 矢部村では、国有林の広葉樹林から針葉樹林の転換地の 280ヶ所（調査数）における山地崩壊で、伐根が腐朽して人工林をスギ人工林の根茎に入れ代わる途中であったことにもよりますが、崩壊地の深度は 3m 以上あり、根茎の深度を超えた位置での崩壊でありました。5. 夜明ダムは 4 門の内 1 門が完成しておらず、防災の機能を果たしませんでした。6. これを機会に、ダム建設反対運動は少なくなり、日向神ダム（矢部川、1953 年着工/1960 年竣工）、下笠ダム（筑後川、1958

年着工/1972年竣工)、松原ダム(筑後川1958年着工/1972年竣工)へと建設が進められました。これ以降の流木被害はダムによって軽減され、『筑後川水系治水基本計画(筑後大堰含む1974年着工/1985年竣工)』が推進されることになりました。

【昭和38年背振山の山地崩壊】

6月、集中豪雨、福岡市・早良町・小郡町の被害甚大で、背振山系の山崩れ災害により早良町から油山にかけて2,636余箇所の崩壊が発生し、その濁流水によって、内野小学校は押し寄せた土石流により倒壊、野間付近まで大小の運石で河床が埋まりました。昭和30年頃のエネルギー革命によって、広葉樹林から人工林化が進み、旧広葉樹林の根が腐朽して、人工林の根に入れ代わる頃の災害でしたが、崩壊面の深さは、根茎の深さを遙かに超える深さで花崗岩特有の崩壊が発生しました。また、昭和38年から39年にわたる雪害によって、人工林のスギ立木の凍裂が発生しました。

【昭和47年スギ林折損・ヒノキ林倒木】

篠栗から直方市における風害です。

【昭和53年の大渇水】

福岡市では1978年5月から1979年3月までの渇水であり、前年の夏からの降水量が平年の降水量70%以下で、287日間にわたって時間指定の給水制限が行われることになりました。この結果、山林管理は山側だけでなく、都市部も参画した森林管理を目的に昭和54年(1979)に水源の森基金が発足しました。

【平成3年台風19号による風害・洪水害】

風害によって西日本から日本海沿岸、北海道(リング)の被害が甚大でした。台風は、有明海を北上して、台風の右側の福岡県・大分県では甚大な被害となりました。福岡県の森林は7,002haの風害があり、実に10年分の伐採面積を超える災害。災害木の処理による過剰供給が再生産不可能な木材価格へと下落し、整理伐が終了した平成8年以降も下落した価格となりました。県営林では管理する大半の森林を不採算林として市町村との分収契約を途中で打ち切り、林地を返還しました。県営林は県内の5%の山林を管理して、10%の木材供給を果たしていた優良な森林管理を放棄ことになりました。以後、篤林家も森林経営の不安定化に敏感な反応を示す結果となりました。いわゆる、森林経営悪化のターニングポイントとなりました。

【平成29年の北部九州豪雨災害】

福岡県朝倉市、大分県日田市など24時間の降雨量が統計観測開始以来の一位の値を更新し、朝倉・日田では40人の死者が出ました。この時の都市部（東京など）では、復旧について、危険な場所での再建に税金を使ってよいのかという議論がありました。災害地は縄文期の氾濫面まで崩壊が発生していました。山村では大半が旧氾濫面に居住していることから、ここでの生活を否定されると、山村の定住地はなくなります。また、過熟した人工林だから崩壊したとも言われていました。針葉樹・広葉樹を問わず根茎の大半は地上から下方へ約60cmに集中し、凹型地形の崩積土面の根茎は浅く1mを越える根は僅かしかありません。崩壊地の深度は3m以上あり、森林は日降雨が200mmであれば、災害は少ないのですが、その降雨が集中すると、根系より深いところから崩壊を起こします。また、この時の流木は大径木であったことから、下流に甚大な被害が発生した。一方、上流のダムの効果は抜群でありました。

【九州と筑後川の流木流失頻度】

九州における流木被害数は江戸の中期から幕末までは15年に1回、大正前期頃から昭和前期には5年に1回の割合、昭和後期はそれまでの放置林に植栽し幼齢林が多く、前生樹の伐根が腐朽する頃で2年に1回、平成の前期頃より森林は成熟化し、流木災害の頻度は減少し、3.3年に1回の割合となり、流木の回数は近年減少化傾向にあります。ここで注意することは、濫伐期後の根茎の修復には20年以上要することです。

【橋梁の流失】

橋梁の流失は森林保護に努めた江戸期には、橋梁が少ないこともあって4回程度であり、明治5年に地券が交付されて以降、伐採地の約3割程度が造林されて多くの森林で略奪林業されて、昭和23年まで続きました、この間の橋梁の流出は多く、昭和23年以降の橋梁の流失は頗る減少しましたが平成10年以降になると、再び流失が多くなりました。九州の橋梁流失の3分の1が筑後川に集中しています。過熟林の崩壊によって大径木が流失して、橋梁の規格が大径木に耐えられないことが原因でしょうか。

【旱魃・渇水の九州と筑後の比較】

飛鳥～安土桃山時代までは33年に一回程度の旱魃、江戸期は2.4年に1回、明治・大正期には1.25年に1回、すなわち5年4回。昭和・平成期に

は 6.2 年に 1 回で、江戸期を基準にすると、旱魃は減少の傾向が見られません。昨今は、人間にとって都合の悪いことは温暖化や気候変動のせいになりますが、けっしてそうではないことが判ります。江戸期の一揆では洪水による生活苦が挙げられますが、加えて、旱魃（昆虫害）による不作と取り立ての厳しさも大きな要因となっています。

【雪害】

江戸期の雪害は 8.3 年 1 度、明治期は 9 年に 1 度、大正・昭和の前期は 3 年に 1 度と頻繁になり、昭和後期の前半は 1.4 年に 1 度で頻度はさらに高くなりました。昭和後期から平成になると激減して 50 年に 1 度となり雪害は少なくなりました。1970 年（昭和 45）までの傾向によると、雪害が多くなる一方でしたが、近年での雪害は極めて少ないようです。また、九州全体で見ると筑後の雪害は多いといえます。

【終言】

以上、森林と気象災害を見てきましたが、確かに森林の防災機能は極めて大きいものの、絶対ではなく、限界を超えると、功が罪ともなって、人々の生活を脅かすこともあります。

福岡県地方史連絡協議会
【地方史大会】

筑後地域及びその周辺地域に おける気象災害

～森林管理の立場から～

令和5年6月24日
福岡県立図書館にて

久留米郷土研究会
福島敏彦

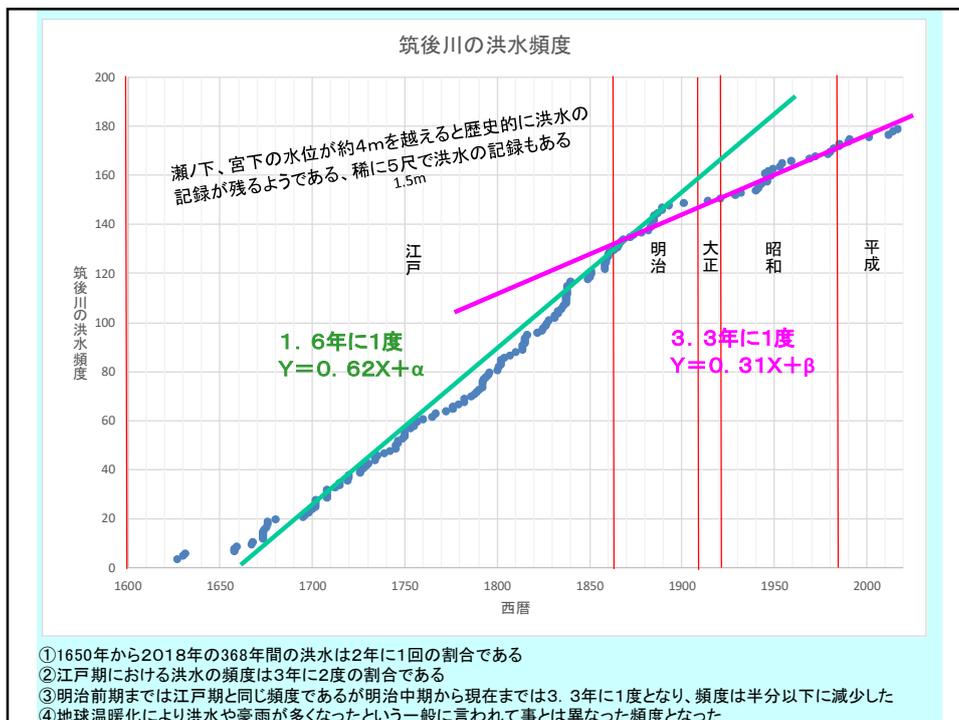
今回の目的

- ①災害は繰り返しありました
- ②その度に未曾有・初めての災害経験
- ③災害の種類・頻度・規模など
- ④九州各地と筑後地域と比較
- ⑤歴史的視点から災害を軽減する

九州地方整備局管轄(一部) **九州地方における水系流域の面積**

水系名	水系本川延長	Km ² 水系流域面積	流域自治体	水系流域内人口	支川数	水系年平均流量	BOD	ダム数	水力発電所数
遠賀川	61	1,026 (8)	福岡県	666,406	74	31.47	2.6	23 (0)	1
山国川	56	540	大分県、福岡県	36,801	39	20.81	0.9	1 (0)	1
筑後川	143	2,863 (1)	熊本県、大分県、福岡県、佐賀県	1,090,777	235	95.09	1.6	29 (2)	22
矢部川	61	647 (11)	福岡県	182,889	23	21.54	1.1	17 (2)	4
松浦川	47	446	福岡県	97,818	80	12.46	2.4	22 (0)	3
六角川	47	341	佐賀県	122,827	79	4.36	2.1	9 (1)	0
嘉瀬川	57	368	福岡県	133,412	51	14.10	1.0	3 (2)	8
本明川	21	87	長崎県	54,583	18	2.11	1.8	2 (1)	0
菊池川	71	996 (9)	熊本県	208,694	68	39.56	1.1	1 (0)	4
白川	74	480	熊本県	131,375	16	25.39	2.5	3 (1)	4
緑川	76	1,100 (7)	熊本県	517,189	59	36.17	2.4	4 (2)	11
球磨川	115	1,880 (3)	熊本県	137,375	82	119.92	1.4	11 (4)	20
大分川	55	650 (10)	大分県	252,808	48	22.33	1.4	7 (1)	14
大野川	107	1,465 (6)	熊本県、宮崎県、大分県	206,818	138	61.36	0.6	14 (0)	10
番匠川	38	464	大分県	56,527	52	12.17	1.1	5 (0)	0
五ヶ瀬川	106	1,820 (4)	熊本県、大分県、宮崎県	127,638	102	60.94	1.1	8 (2)	22
小丸川	75	474	宮崎県	32,616	16	32.76	0.5	8 (4)	5
大淀川	107	2,230 (2)	鹿児島県、熊本県、宮崎県	601,321	134	107.61	1.3	16 (3)	12
川内川	137	1,600 (5)	宮崎県、鹿児島県	195,944	129	91.09	0.7	4 (2)	5
肝属川	34	485	鹿児島県	115,578	36	31.69	4.5	2 (0)	3

災害は県境を越えた規模で発生しています。



筑後川3大洪水の記録				昭和28災は3大には入らない		
明治22年7月4日～5日	1889	7	4	洪水	福岡佐賀大分	福岡：筑後川大出水、久留米瀬/下8.6m、宮の陣で9.7m、日田部下村長谷（日田市内）の流量49万立方尺（秒当たり）、筑後川沿岸の死者52名、流失家屋1263棟、田畑の浸水9千町余、救出救助者7万余名、佐賀：豆津川6.7mの増水沿岸下流被害大 ¹¹ 。死者日田18人、久留米52人、家屋被害日田8,460戸、久留米48,908戸、第2期改修の必要生を痛感せしめた洪水 ¹⁰ 。（筑後川3大洪水）。遠賀川流域の死者11名、家屋流出倒壊127戸、浸水家屋2069戸、堤防決壊2286ヶ所、橋梁破壊412橋 ¹¹ 。遠賀川は流域甚だ延長ならざるも、平時水勢急なる因り。又非常の激昂をなしその災害は筑後川に次ぐ ^{福岡県歴史} 。矢部川大洪水 ¹³ 。福岡県大水害 ^{黒水書史} 。
大正10年6月17日	1921	6	17	大雨洪水	福岡県	気圧配置は純然たる梅雨型、東シナ海の低気圧は多数で動かず、長雨となる。土地、樹木は飽水の状態の折別の低気圧は上海方面に動いて大雨となる。又対馬海峡にも副低気圧が発生して応接の暇なし、矢部川の上流星野・矢部・大湖に上昇気流による大雨を豪（4時間に300mm）、そのため173町歩に及ぶ山林が大崩壊を引き起こし、下流域に大被害、死者21名、明治22年以來32年振りの大惨事 ¹ 。連日の降雨で筑後川増水。流水多く鹿児島本線鉄道橋を除き橋梁ほとんど流失、被害甚大。浸水家屋11,620戸、第3期改修の契機となった洪水。瀬下7.11m（筑後川3大洪水） ¹⁰ 。矢部川、筑後川の大洪水あり、300年来の被害 ¹³ 。浸水面積13.5ha ¹⁵ 。
昭和26年10月10日～16日	1951	10	10	ルース台風	九州全域	10月8日グアム島の南方洋上で熱帯低気圧として発現→フィリピンのマニラ島東方洋上→13日～14日にかけて沖縄島の間→東シナ海→14日夕7時鹿児島西岸の串木野に上陸→同夜9時熊本市と阿蘇山の中間、ここで中心が2つに分裂した模様→時速80kmの猛スピードで九州本土を縦断→日田付近→国東半島→周防灘→山口県横断→日本海に去る。九州の被害は死傷行方不明3736名（内鹿児島県は2796名）、家屋全半壊82,993戸 ¹ 。死者147人、流出全半壊12,323戸、床下浸水46,323戸、破壊など122箇所、被災者数54万人、現在の治水計画の目標となっている洪水。（筑後川3大洪水）、瀬下水位9.2m ¹⁰ 。鹿児島県の崖崩れ341、山崩れ土石流、死者201人、負傷者2566人、大分県の死者396人行方不明3人 ² 。文獻により被害が異なるので注意

大洪水は30年毎

昭和8年4月の洪水では瀬下8.3mの記録



明治22年7月の筑後川の氾濫

日本三大暴れ川
坂東太郎(利根川)、筑紫次郎(筑後川)、四国三郎(吉野川)

筑後川は時代によっては千歳川・千年川(ちとせがわ)、一夜川(いちやがわ)、筑間川(ちくまがわ)とも呼ばれていた。
筑後川という名称が最終的に本流の名称として統一されたのは1636年(嘉永13年)のことである。

福岡県の気象災害は
約十年ごとに発生していた。

①昭和19年 福岡県の瀬戸内海沿岸地域の山崩れ

1. 戦中の最中であり、報道は殆どなされなかった。2. 略奪的林業下における、広葉樹林の山腹崩壊である。
3. 戦後の昭和21年の米軍の航空写真で確認

②昭和28年6月 県内全域の豪雨災害 (福岡県・佐賀県・熊本県・大分県)

1. 門司市の風師山の崩壊、新聞報道では、門司市風師山の広葉樹林が崩壊して、国道に沿った電車軌道へ。
2. 久留米市 筑後川の氾濫、国鉄久留米駅周辺でも1mを越えた浸水、3. 更に下流の安武小学校の一階まで浸水。
4. 矢部村では、国有林の広葉樹林から針葉樹林の転換地における山地崩壊、旧林の伐根が腐朽して崩れやすい環境。
5. 夜明けダムは4門の内1門が完成しておらず、防災の機能を果たさなかった。6. これを機会に、ダム建設反対運動は少なくなる。日向神ダム(矢部川、1953/1960)、下笠ダム(筑後川、1958年/1972年)、松原ダム(筑後川1958年/1972)。
6. 『筑後川水系治水基本計画(筑後大堰含む1974/1985)』の推進

③昭和38年 背振山(油山を含む)の山地崩壊 2636ヶ所

1. 昭和30年を境に、エネルギー革命があり、広葉樹の新炭林施業から、針葉樹の用材施業へと転換した。
2. 旧広葉樹林の伐根が腐朽して、人工林の新しい根に移り変わる途中の森林が崩壊した(2620ヶ所、背振山のみ)。

④昭和38～39年 大雪害(西日本・山陰・北陸)

1. 森林の倒壊、折損、凍裂害。2. 都市機能不能。3. 山陰でも大雪で3日間、国鉄不通

⑤昭和47年 スギ林の折損、ヒノキ林倒木(篠栗町～直方市)

1. 今でいう線上降雨ではないか。2. 北九州を中心に交通混雑。

⑥昭和53年 大渇水、西日本一帯

1. 福岡市では1978年5月から1979年3月までの渇水である。2. 前年の夏からの降水量が平年の降水量70%以下。
2. 287日間にわたって時間指定 断水 による給水制限が行われることになった。
3. 1979年に川上の山地と川下の都市による森林管理を可能にした水源の森基金が発足。

⑦平成3年 台風19号による風害 (西日本～日本海沿岸、北海道(リンゴ))

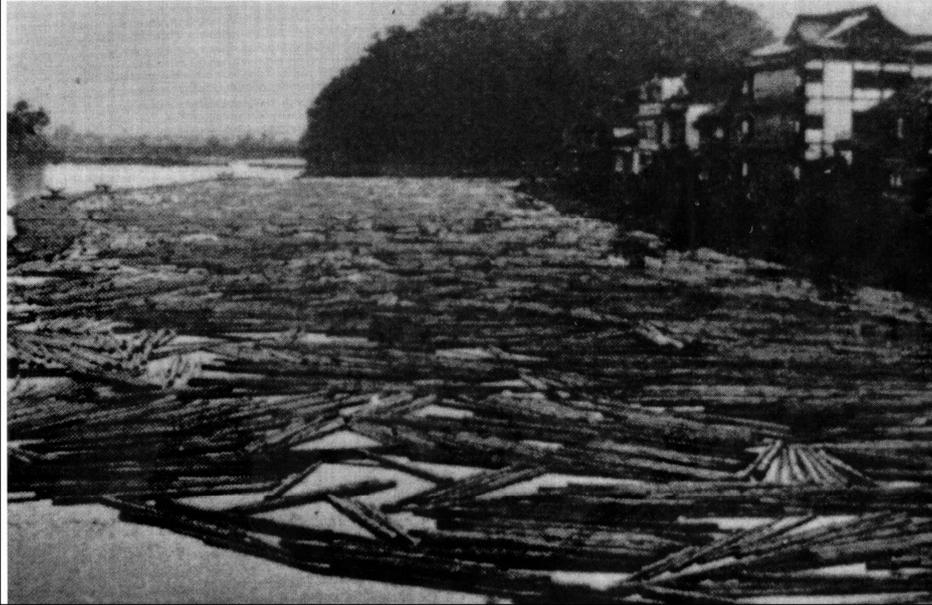
1. 福岡県の森林は7002haの風害があり、実に10年分の伐採面積を超える災害。
2. 災害木処理による過剰供給が再生産不可能な木材価格の下落し、整理伐が終了した平成8年以降も下落した価格。
3. 県営林も大半の管理森林を不採算林として市町村との分取契約を途中で打ち切り、林地を返還した。
4. 県営林は県内の5%の山林を管理して、10%の木材供給を果たしていた優良な森林管理を放棄することになる。
5. 以後、篤林家も森林経営の不安定化に敏感な反応を示す結果となった。

28災害 鉄道橋以外の橋は全て流失(久留米)



昭和28年水害時の宮ノ陣鉄橋

日田代官所付近28災害の流木(輪掛けの短木が流失)



最近の福岡県の気象災害を詳細に見ると

大半を省略

⑧平成5年 台風13号 全九州

- 種子島で最大瞬間風速59.1m/s
- 大分の1時間最大降雨量81.5mm、総雨量2855.5mm
- 被害箇所は宮崎県の38、鹿児島県が31で福岡県3ヶ所
- 死者は43人、負傷者は49人
- 玖珠川で大きな洪水を記録、瀬下の水位4.56m
- 平成3年のモメ木が倒木

⑨平成6年7月～平成7年6月 湯水 福岡市・北九州市とその周辺市町村

- 295日の給水制限、のべ断水時間2452時間、筑後川からの取水制限

⑩平成11年 豪雨災害 福岡市

- 梅雨前線と低気圧、御笠川の氾濫、博多駅地下鉄街水没、死者1人。2. 遠賀川流域、床上浸水232戸、床下浸水930戸。
- 道路・JR・福岡市営地下鉄の一部が運休するなど、この水害は我が国都市部、特に地下空間における問題を提起した

⑪平成13年 梅雨 筑後地域

- 床上浸水23戸、床下浸水180戸、花月川支流有田川、寒水川(しょうずかわ)で氾濫、瀬下の水位3.84m

⑫平成15年 風水害 土石流災害 九州全域

- 前線が日本海に停滞。太宰府市の1時間雨量は104mm、積算雨量は361mm、死者23人。被害箇所は福岡県1271
- 遠賀川流域の被害は負傷者2名、家屋全壊7戸、家屋半壊9戸、床上浸水1957戸、床下浸水1778戸、日の出橋水位8.07m(11)。
- 平成11年に浸水した下流地区では激甚災害特別対策の事業中の御笠川が再び氾濫し、特に博多駅周辺での被害が著しい。

⑬平成21年 風水害 土石流災害 福岡・佐賀・長崎

- 九州北部豪雨災害、福岡県の死者8人、行方不明2、軽傷7、崖崩れ639件、地にり3件、家屋全壊4

⑭平成22年 風水害 土石流災害 福岡県

- 福岡県の崖崩れ404、道路648、橋梁2、軽傷2人

⑮平成23年 梅雨前線による土石流災害

- 九州各地で家屋浸水や土砂災害が発生し、崖崩れ237件、負傷者4人。2. 球磨川流域では人吉水位観測所では氾濫危険水位を越えた

⑯平成24年 風水害 土石流災害

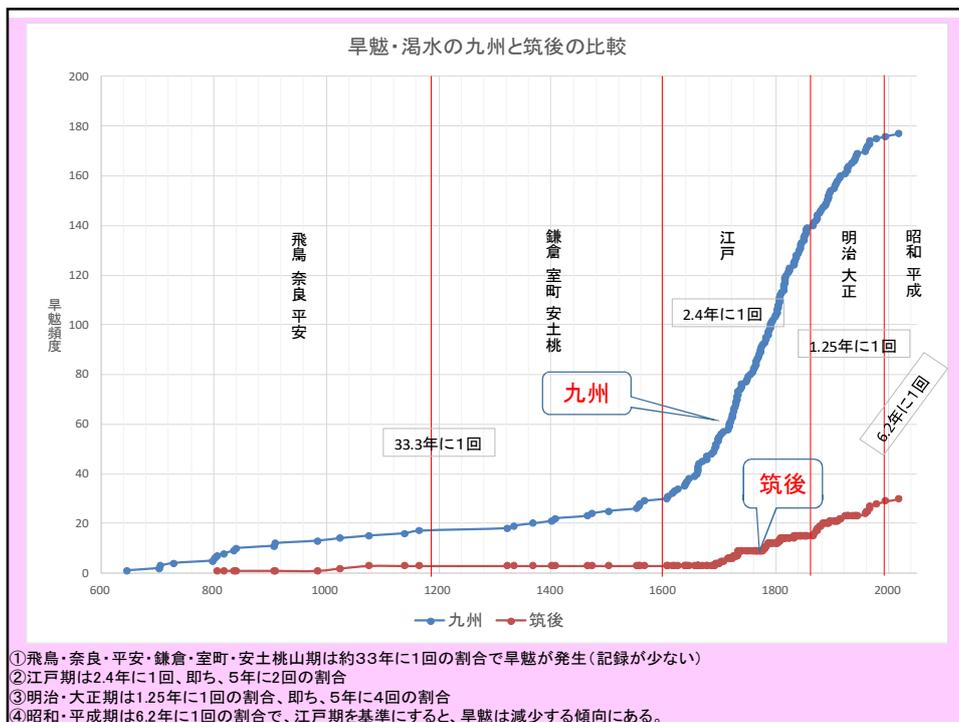
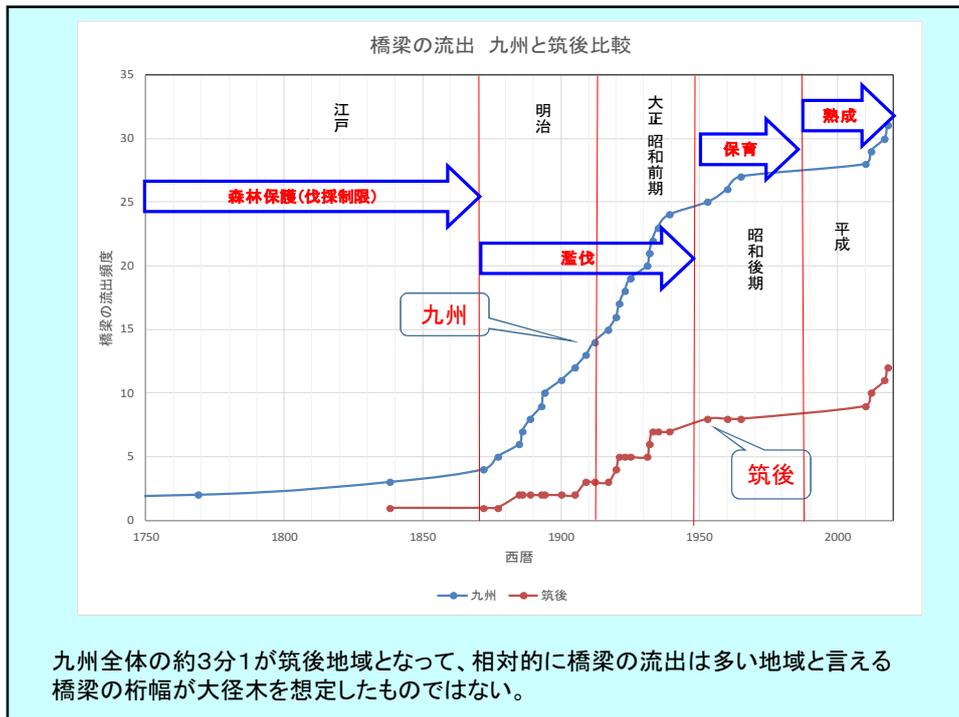
- 河川の氾濫や土砂が発生し、福岡県・熊本県・大分県では死者30人、2. 八女市黒木町笠原では、大規模な脚部喪失型の崩壊が数カ所で発生した。また流木の発生により、上陽町の石橋も一部で破損し、笠原でも小さな石橋に丸太が堆積し、溢流を拡大した。

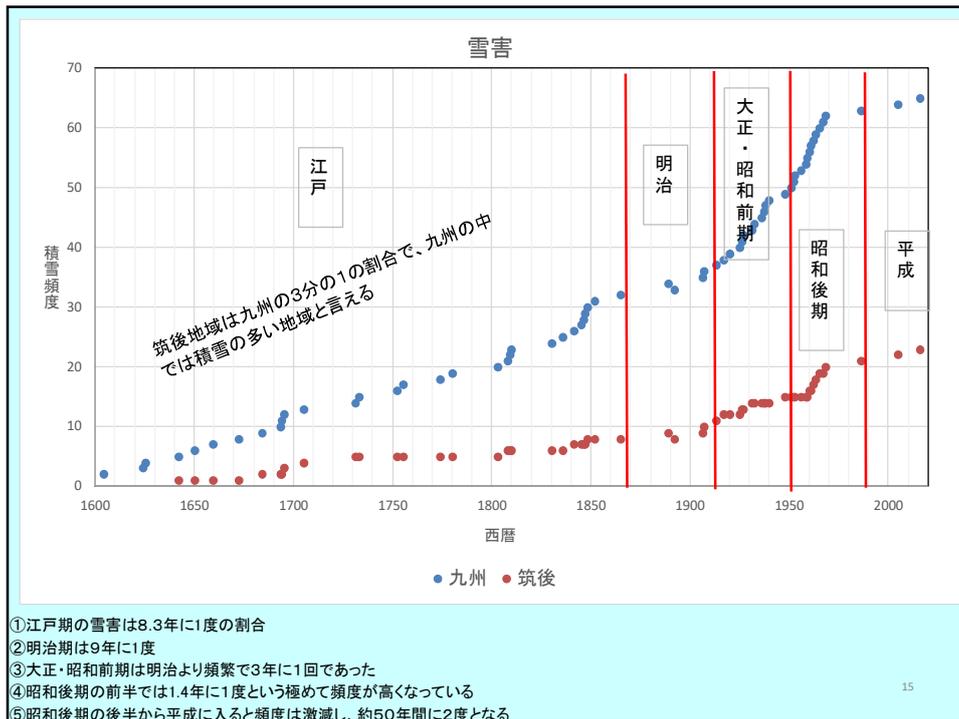
⑰平成29年 北部九州豪雨災害 福岡県朝倉市、大分県日田市

- 朝倉市、大分県日田市など24時間の降雨量が統計観測開始以来の一位の値を更新し、朝倉・日田では40人の死者。

⑱令和3年 筑後川支流の内水面氾濫 久留米市・佐賀県

- 筑後川支流における内水面の氾濫





15

おわり

以上、森林と気象災害を見てきましたが、確かに森林の防災機能は極めて大きいものの、絶対ではなく、限界を超えると、功が逆に罪(流木)ともなって、人々の生活を脅かすこともあります。

令和5年6月24日

第56回 福岡県地方史研究協議大会

編集兼発行 福岡県立図書館ふくおか資料室